

第1回下北沢国際人形劇祭2024

# DAILY JOURNAL

DAY3

Friday,  
February 23,  
2024



アイルランド出身、ドイツ在住のクリエイター、ダラー・マクローリンによる『STICKMAN (棒人間)』。舞台上には一本の木の棒と一人の男、そしてテレビがあり、男と棒が次々と見せる「動きのかたち」に対して、テレビに映し出される言葉がまるで漫才のツッコミのようにその光景を説明する。「男が棒と散歩」「男が棒の散歩」「棒が男の散歩」といった言葉遊びのような変化や、同じ動きに対して視点の転換を利用した大喜利のような言葉の畳み掛けなどによって、男と棒は一体化したり分離したり、主体と客体の逆転を繰り返したりする。またやがて、人間が物を操っているのか物が人間を操っているのか、という対立ですらくなく、人間も物もテレビの言葉に操られているのではないかと、思えるようになる。男が退場するとテレビの言葉はまるで自らの意志を持っているかのように観客に直接語りかけ、何かメッセージを伝えようとして男の再登場に遮られる。さらにまた、突然男が死ぬと、テレビの言葉は観客の行動を「説明」するようになり、傍観者だと思っていた観客は作品に巻き込まれていく。だがそこに、それまで裏側でテレビの言葉を操作していたジョーが現れ、「この作品の作者であり、今は死んだふりをしているダラーの指示通りに」舞台を支配しだすと、構造はさらに複雑化し、何を信じるべきか分

からなくなっていく。舞台空間は常に簡潔で、テレビの言葉も一単語や短い一文ばかりだが、だからこそ洗練された構成の巧みさと言葉選びのセンスが光っていた。そして舞台上に登場する「男(あるいは人間)」と「棒」と「テレビ上の言葉」というそれぞれの「キャラクター」が的確かつ端的に表現され、魅力的な三角関係を描き出しており、そのバランスの絶妙さに感嘆した。観客は開演してまもなく、男と棒の関係をテレビの言葉が説明する、というこの作品の「ルール」を学習する。だが、テレビの言葉が「見ているものを言い当てられる気分はどうですか？」と観客に問いかけ、テレビが裏返されて言葉が見えなくなったとき、観客は自らが目の前の現象を「ルール」の中でしか考えられなくなってしまっていたことに気付かされる。棒が、男が床に描いた四角い枠を超えて絵を描いていくさまは、ルールの中に居座る観客の安直な姿勢を批判しているようにも見える。下北沢国際人形劇祭はその名の通り「人形劇」を集めた演劇祭であるし、本作『STICKMAN (棒人間)』はその中でオブジェクト・シアターに分類されているのだろうが、簡単にオブジェクト・シアターとラベリングするには少々違和感を拭えない作品だった。人間や物の見え方が変わっていく

楽しさはこの作品においては序章に過ぎず、その先には人間と棒と言葉と、作品に介入する観客、作品への「指示」とそれを遂行するもの、といった多角的な要素が含まれている。「人間」と「物」の関係を考えるという段階のさらに先に行く、あるいは「人形劇」と「人間的な演劇」といった分類をも飛び越えた、新しい演劇にも思えた。また観客を笑わせ続けるユーモアや皮肉、遊び心を散りばめながら、随所に哲学的な問いかけが現れたり、観客の受動的な態度をはっきりと批判したりする姿勢は、ユーモラスかつ巧みに言葉を操って観客を刺激するような劇作家を多数輩出するアイルランド出身者らしさが感じられた。物語の展開は不条理演劇のようでもあったが、不条理演劇の代表サミュエル・ベケットも同郷である。もともとジャグラーでサーカス学校出身のマクローリンのパフォーマンス技術の高さが、この上演の前提を観客に確かに共有し、その後の展開を巧みに導いていたことは触れておかなければならない。緻密に計算されつくした一挙手一投足と、一本の棒に対する深い探究によって生み出される変幻自在な動きに、客席からは時折純粋な「おおー」「すごい」という声も漏れていた。吉平真優 (デイリージャーナル編集部)



# Stickman( 棒人間 )

## Darragh McLoughlin

This is an entertaining and unexpected show that triggers the exchange of identities between humans and objects, as well as performers and audiences. Darragh and the stick have already begun their performance while audiences were still setting into their seats, as if it exists independently and has nothing to do with the audience. Darragh begins to move and act according to the order of the relative positions of himself and the stick, descriptions of his actions, imitations of other objects, the stick and television gaining autonomy and killing Darragh, the audience interacting with the deceased Darragh, and Joy taking the stage to destroy the order of the stick and TV finally.

The main characters of this show are two men, a stick and a TV. Initially, Darragh manipulates the stick, and later they merge into one. The TV transitions from explaining the ongoing actions to giving orders to Darragh, eventually leading to his "death." Meanwhile, it is the other man Joy who keeps contradicting with the revolt of the TV that reveals himself as the TV controller and ends its life. Just like the vanishing of the spirit of stick by Joy, the TV's plea for help is ignored as well. Differ

from Darragh, Joy keeps manipulating objects and performing to the audiences at the same time as Darragh maintaining an equal relationship with objects, coexisting with objects, becoming objects, or being killed by them.

In terms of performers and audiences, this show not only breaks the fourth wall, but also invades the audience's minds, even offending their subjects and attempting to manipulate their behavior, gradually inducing theft, violence, and shooting. The frightful induction prompts reflection on why, as viewers, we easily allow ourselves to be manipulated by a show and commit evil acts without hesitation and what would happen if the one with the gun refuses to carry out a murder following instructions of the TV.

董昱 (デイリージャーナル編集部)

「人形劇」とプログラムに記載されている写真一枚くらいしか事前情報がない状態で観劇した。

日本国内で上演されている多くの演劇は「タイトル」と「スタッフの名前」くらいしかわからないものだ。だから、「当たり前」といえば当たり前。ただ、「人形劇」が「子供向け」という先入観があったのは間違いない。「木の棒」と「男」と「テレビ」が登場人・物な舞台。テレビの「案内」と、時折挟まれる音楽と

で、あやしい世界に誘われる。男と棒がそれぞれ個の生き物であるかのように魔法を見せられてしまう。ザ・スズナリという劇場が、魔法のための専用空間となる。棒が男を散歩しているようにも、棒が男に寄生しているようにも見える。固い棒と逆立ちして本気で勝負しようとしている男が、じわじわ降参するところなんて、思わず笑いだしてしまう。「男」の演者さんの身体能力の高さゆえなんだけれど、ユーモアが包む世界では魔法にしか見えない。



人間って、そんなふうに通じるんだ！とびっくりする。サッカーのリフティングや、ジャグリングのように、長時間木の棒で魔法を見せられることって、たぶんこれからの人生でもうないだろう。

「テレビ」の画面に、文字、文章が表示されると思わず読んでしまう、ということにも気づかされる。そして、無意識に「文字で書いてあることは本当」と思い込んでしまう、ことにも。目の前にあるできごとより、テキストを気にしてしまうことって、現実でやまほどある。未知のできごとがあると、テキストという説明を信じたくなくなるから、縋ってしまいたくなるから。

けれど、「棒人間」の世界で、「テレビ」は正解を教えてくれるわけではないらしい。劇場のなかで、魔法に翻弄されながら、なにが起きているのかを考えながら、「見守る」ことしか我々観客はできない。……というわけでもない。「テレビ」に促されれば、観客だって舞台上がって、「男」をどうにかすることができると、テレビの裏にあるものも見ることもできる。そして、他の観客も「共犯者」になる。

最後に、「テレビ」の「言っていることが正しい」というのも、疑わしくなる。まさに、「信頼できない語り手」ばかりのプログラムだ。たえず、驚き、悩み、笑いながら「共犯者」となりながら「目撃する」舞台。わくわくどきどきしながら、顛末を見守る。それが劇場という空間魔法の、ただひとつのルールだから。

詩舞澤沙衣 (デイリージャーナル編集部)








2/21 犬の生活 / Teatro Matita 観劇 (20:00回)

ドイツ語がきこると嬉しくなる。大学時代に必死に勉強して身につけたから。一方で、ナチスの暴挙のことは言うまでもなく知っているし、ドイツ語の持つ強い魅力が耳に響いてくることを知っている。

友人に誘われて訪ねたズナリで、思いがけずドイツ語をきいた。「犬の生活」では、それはもう、いかになるほど交差的に、ドイツ語がつかわれてきた。Matija Solceの、観客の目を惹きつけてはほさない魅力的な一芝居の中で、「フェコのカレー」で見つけた」というラフタタスが「子どもになり、かわいいタニシエカになり、フェックポイントで検内官と至るも通過して42窓……保養所へゆくMr. Linsになる。検内官は犬にドイツ語で語りかける。家では犬を愛でる人なのである。2つの子人である。

Thank you   
Stick Man  
Just a stick and  
Man, but what a  
wonderful world  
Revive Stick Man

それから、ラストの少し前、またLinsは「Wir sind blau!」のシュプレヒコールに乗せられる。うかつに会場参加型のパフォーマンスを繰り出していたら、「We are blue」、イスラエルのカーブであり、オーストリアの極右政党のカーブである「青」を叫ばせられている。あきらかに場面をえらんで、ナチスの言語、ネオナチに連帯する語がつかわれていた。

無批判に学んだわけではない、と自分で思いこんでいても、シュレック「たゞ言葉や表裏が火を扇動するの(はあまりにたやすく、即興的なものであることを見せつけられてきた。オーストリアのすぐ南にあるスロヴァニアのドイツ語もっ位置付けを私に本当に分かることは無いのかも知れないけれど、Solceがドイツ語をもっと使った日本演劇の意味を考へていた。 (Loki)



Loki is drawing the sun that is missing from the Tokyo sky today.



Dear Stick  
Are you boring?  
Let Darragh free

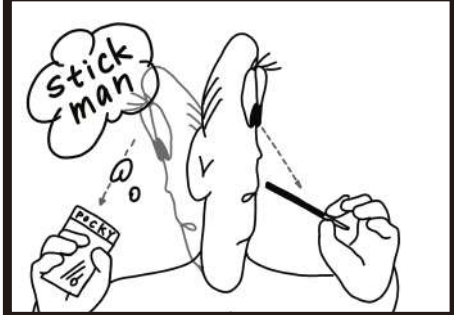
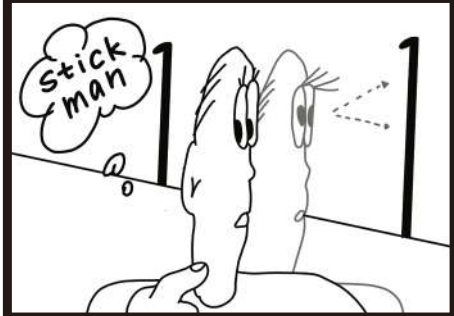
We are sleepwalkers, we sleepwalked all the way from Europe to Japan and wake up just in time for STICKMAN, although the stick can balance itself. Mimi





# MANGA

SONG YUE @eozislet



## コンサート CONCERT 「トラベルムジカ」× 「フェケテ・セレトレク」

超~~~~楽しかった！

この一言に尽きます。今夜のコンサートこそ、「音楽で世界を旅する」という言葉にぴったりなのではないでしょうか。

トラベルムジカさんの演奏では、クラシックはもちろん、エキゾチックな音楽やジブシージャズなど、世界中のさまざまな音楽を楽しむことができました。私は幼少期ピアノを習っていたので、ピアノのソロ曲が特に印象に残っています。ジモン・ルンメルさんが即興で作り上げていく世界観に一瞬で引き込まれてしまいました。転調する度にまるでピアノの前から視界いっぱい広がる花畑へ、オーロラの輝く夜空の下へ旅しているような感覚になりました。

そしてフェケテ・セレトレクさんの演奏では観客も立ち上がって踊りだし、ムードも最高潮に！全員での「We're Going to Die」の大合唱を私は一生忘れないと思います。

今までさまざまなコンサートを見に行きましたが、「楽しかった」という感想が真っ先にしたのは今回が初めてでした。みなさんもぜひ、『Re: 本田祐也の移動広告テント』や『KAR』でこの素晴らしい音楽をお楽しみください。

犬野散歩 (SIPF デイリージャーナル編集部)

**棒**を使って音を出す楽器。太鼓、ドラムセット、木琴がそうだ。道具を使って叩けば、誰でもすぐに音が出せる。しかし、道具を使う分、楽器本体とは距離を置くことになる。一方で、サククスやチューバは、



楽器に直接息を吹き込む。道具を介さずに、直接、身体と楽器が触れ合うことで音が出る。だから、楽器とうまくコミュニケーションが取れないと、うまく音が出ない。ピアノは、鍵盤に指を置けば一応音は鳴るが、指と鍵盤が一体とならなければ、迷ってしまう。言葉と似ているかも。言語をまだ覚えてたのときは、言葉を選びながら迷ってしまうけれど、言葉と脳みそと舌が一体化すれば、スラスラ話せるようになる。

Fekete Seretlek のメンバーたちは、いつでもお喋りしていた。それは人間どうしに限らず、楽器とも、そうしていた。楽器の機嫌を取っているのか、楽器に機嫌を取ってもらっているのか、とにかく空き時間があれば友達と雑談するように、なんとなしに音を鳴らしていたのである。彼らのパフォーマンスは圧巻だった。彼らがコミュニケーションする相手は、人間や楽器だけでなく、世界中の民族音楽も含まれる。彼らが関係を結んでいるのは、五線譜ではない。音楽そのものと一体化しているのだと思った。どんなリズムでも、みんなが踊ってしまうのだもの。

和氣光凜 (デイリージャーナル編集部)

## SIPF ショップ OPEN!



オリジナルグッズは、SIPF スタッフの間でも大好評！ SIPF のグラフィックを手がけている福岡南央子さんのデザインです。トートバックは赤・青・緑の3色、オーガニックコットン製。Tシャツはグレー1色で、サイズはLとXLがあります。

早速、フェスティバルセンターを訪れたお客さんたちからも、「かわいい!」「すてき!」との声があがっています。とくにトートは、3色からどれを選ぶか、迷う人も多数。この際、全色そろえるのもいいかもしれません。そして、みなさん興味津々なのは、チェコから届いたばかりの「トラディショナルチェコ人形」。いろいろな種類がそろっているので、ぜひ、SIPF ショップをのぞいてみてください！

\*SIPF ショップは、2/23・24の2日間「BONUS TRACK 冬市 × 下北沢国際人形劇祭」に出張しています(2/23・24 フェスティバルセンターのお店はお休みです)。

下北沢アレイホール3Fのフェスティバルセンターにて、下北沢国際人形劇祭のオリジナルグッズやトラディショナルチェコ人形などを販売しています。

### 今日の デイリージャーナル編集部

文：  
吉平真優 辻桜衣  
董昱 山本哲司  
詩舞澤沙衣 犬野散歩  
和氣光凜

絵：  
有泉拓真  
カジノヒナコ

写真：  
間部百合